

---

令和3年度 第2回

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和3年2月2日 施行

---

注意事項

1. 試験開始の合図<sup>あいず</sup>があるまで、この冊子<sup>きつし</sup>の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生<sup>くせんせい</sup>どうしの貸し借り<sup>かひかり</sup>もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子<sup>きつし</sup>の印刷<sup>いんさつ</sup>が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落したり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子<sup>きつし</sup>のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は22ページまであります。
8. 問題冊子<sup>きつし</sup>は持ち帰ってください。

一

次の各文の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① この方針に対してイゾンはありませんか。
- ② あこがれの選手と会えてカンゲキした。
- ③ 最終的に私の意見がサイヨウされた。
- ④ 人類のソセンについて研究する。
- ⑤ トウブンのとりすぎには注意しましょう。
- ⑥ ブームにビンジョウして売り上げをのばした。
- ⑦ お墓に花をソナえる。
- ⑧ 個室にこもってミツダンをかわす。
- ⑨ 長い年月を経てできあがった地層。
- ⑩ ゴミの分別の規則を設ける。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

筆者は、世の中の「問い」といわれるもの（クイズから資格試験の問題に至るまで）に共通している性質として、正解を導くための客観的な「手がかり」を含んでいるということと、解答者がその「手がかり」に簡単に気づかないようにするための工夫がなされていることの二点を挙げている。また、後者に関して、解答者の目から手がかりを隠すための工夫・技術のことを、「雑音」と名づけている。以下の文章はそれにつづくものである。

そして、実は①問題の難易度に大きく関係しているのは手がかりではなく、雑音の方なのだ。考えてもみてほしい。「手がかり」は、最終的には誰も<sup>たれ</sup>が納得する<sup>なっとく</sup>ような客観的なものでなければならぬことは先にも述べたが、ということは当然ながら「はつきりしたものである必要がある。これを薄く<sup>うす</sup>しすぎると、どこかで「手がかり」として機能しなくなってしまう、答えの出ない問題ができてしまうことになる。

先ほどに続けて音にたとえるなら、少なくとも誰にでも聞こえるだけの音量で手がかりは鳴らしておかなくてはならないのだ。そうなると、同じ音量で鳴っている手がかりをどの程度隠すかは、雑音の音量によってほぼ一意に決められてしまうことは明白だろう。しかも、その雑音の音量は②出題者がその問いにどのような使命<sup>めい</sup>を与えるかによって大きく変わってくる。

たとえば、食品メーカーなどがよくやっているクイズには次のようなものがある。

「おいしいのは○○○コーラ」の○の中に正しい文字を入れて送ると豪華<sup>じゅうか</sup>な賞品が当たります！というクイズをペプシコーラが出したとすれば、もちろん正解はペプシである。ここには「出題者はペプシコーラ」という重要な手がかりがあり、しかも雑音は全くない。だから、誰でも正解できるのだ。このような問題を出す出題者の意図はもちろん明らかである。なるべく多くの人に正解を出してもらい、ついではがきを送ってもらってその人々の個人情報を手に入れ

たいのだ。

反対に雑音を大きくすれば大きくするほど、問題は難しくなる。\*紙上で再現するのは難しいが、私が高校生の頃流行った怪しいクイズの中に次のような問題があった。ただ、この当時のクイズはほとんどナンセンスクイズと言っていい類のもので、内容的には実にくだららない。私がこれから提示する問題も実際くだらない問題なので、あまりまじめに考えられては困る。

では始めよう。

問題 新大阪を出た新幹線は東京に向かうか、博多に向かうか。

いかがだろうか。そんなのどっちだつてあるじゃないかと思つた方へ申し上げよう。正解は「東京へ向かう」である。え？ 何を言っているかわからないつて？ よろしい。では数行前のアステリスク(\*)のところまで戻つてもう一度読み直してほしい。わからなければもう一度。さらにもう一度。もう四回読み直したけれど、降参するという方、よろしい。では次に進んで種明かしを読もう。

アステリスク(\*)以下の部分で私はこう言っている。「紙上で再現するのは難しいが、私が高校生の頃流行った怪しいクイズの中に次のような問題があった。ただ、この当時のクイズはほとんどナンセンスクイズと言っていい類のもので、内容的には実にくだららない。私がこれから提示する問題も実際くだらない問題なので、あまりまじめに考えられては困る。問題は『新大阪を出た新幹線は東京に向かうか、博多に向かうか』というものである」。

そう、二回も繰り返して言っているのだ。「下らない」と。(注1)下りでなければ当然「上り」であり、新大阪から見れば東京方向、というわけだ。怒つてはいけない。そう、はじめに「ナンセンスクイズ」と断つたではないか。

ふふふ。読者諸氏のブツブツ言う(注2) 怨嗟の聲が聞こえてきそうだが、そうかつかする前に冷静に考えてみると、

③この問題にはいわゆる「問い」の持つ性質のすべてが実に鮮やかに使われているということに気づくだろう。何しろ、手がかりはあまりにも明確である。「下らない」なのだから。だが、その情報をそのまま伝えたのでは(1)あからさますぎで「問題」にならない。そこでその「下らない」という言葉を全く別の文脈に見えるものの中に隠したのである。しかも、いきなりだと警戒されるため、最初に「ナンセンス」だと断って「下らない」という言葉を受け入れやすくする(2)素地を作っておく。さらに一回目の「下らない」は「内容的に」を付け足すことでいわゆる「馬鹿げている」という意味の「下らない」になっている。人間は同じ言葉を繰り返し使われると同じ文脈で同じ意味にとらうとする傾向があるので、これでまんまと解答者を「はめる」準備ができたわけだ。

さらに微妙なのが「これから提示する問題も実にくだらない問題なので」という部分である。これを「これから提示する問題も実にくだらないので」とすると、その「下らない」は「馬鹿げている」という意味でしか取りようがなくなる。だが「くだらない問題」とすれば「下りではない問題」という意味に変えても日本語的に間違っていないので、手がかりは十分に解答者の前に提示したことになる。さらに、通常は口伝えで問題を出すのだが、今の場合本に書き込むため、あえて「くだらない」をひらがなで表記してみた。「下」という字から何かを連想されるのを避けるためである。繰り返しになるが、今挙げた問題には「問い」というもののすべての性質が含まれている。何らかの意味で問題と関わるすべての人には、そういうことを少し真剣に考えてみてほしいと思う。受験生とその指導者たる人々には特にである。その種の人々には不思議に(注3) ストイックな人が多く、ある科目の知識を「極める」と称して必要のない自己執着的な探究を続け、多大な(注4) リソースの浪費をしている場合がかなり見受けられる。そういう人は私がこれからしようにする話を「小手先の技術」だと嗤うかもしれない。だが、私はそういう人にこそ、私の話に耳を傾けてもらいたいと思う。

私はむしろ、これから語ることの方が「知性の本性」に近いと確信している。もちろん、各科目、各単元の核心部分については、明確な認識が必要である。それを私は決して否認しない。だが、そういう知識には一定の部分に

「注5」 閾値いきち」があつて、それを超こえていくら量を増やしていったところでそれによって得られるリターンははるかに少ないのだ。むしろそういうものを圧縮し、最小限に絞しぼることにより効率よくものを考えられるのではないか。

大学受験生だけではなく、それこそ司法試験や公認会計士の試験など、長年苦勞しても報むくわれない人が多いと聞く。そういう人がどういふ発想で勉強しているのか直接取材する機会はないが、おそらくは④このあたりに大きな鍵かぎがあるのではないかと思う。

子供の頃に夢中になつて読んだ本の一つに『頭の体操』がある。その中に次のような問題があつた。といつても実はうる覚えなのだが。「ここに使いかけの一本の鉛筆えんぴつがある。この鉛筆を切つたり折つたり曲げたり食べたり一切いっさいしないで、短くしなさい」。

私のかすかな記憶きおくでは、この問題はかなり長考した記憶がある。さんざん考えて結局わからず、答えを見たとなん愕然がくぜんとした。その答えとは「もつと長い鉛筆を持ってきて比べる」だったのだ。確かにもつと長いものと比べれば元の鉛筆は「短く」なる。物理的には全く変化していかないのだが、他と比べることでそういう性質を帯びることになるのだ。

だが、そのことよりも私が愕然としたのは、「短くする」という問いかけに「物理的に」という意味が付帯していると勝手に考えていた自分の思い込みの方なのである。何度読み返しても、そういう記述はない。だからそういう縛りしばり自分にかけて考える必要はハナからなかつたのである。でもいつの間にか私はそういう枠組みわくぐみを自分で勝手に設定し、その中で（注6）自縛じじやく自縛じじやくに陥おちいつていたのであつた。

しかも情けないことに、よく読めば出題者は最初からそう言っているではないか。「切つたり折つたり曲げたり食べたり一切いっさいしないで」ということは、物理的には手を加えずに、という意味であることははじめから明らかであつた。つまり出題者は最初から手の内を明かし、手がかりを設定しているのである。だが、同時に出題者は（確かそうは解説してはなかつたと思うが）、「物理的に手を加えずに」という言葉をあえて避け、「切つたり折つたり……」と表記した。⑤こ

ここにはつきりと「雑音」がある。

これは偶然選ばれた言葉ではない。出題者はそれが解答者にどういう心理的効果を与えるかを十分計算した上で選んだものである。「切ったり折ったり……」という列举の方法をとることで、そこに挙げていない別の方法、つまり「切る」「折る」以外の物理的な手の加えかたがありうるのではないかと考える方向に解答者を（注7）ミスリードしたのだ。

こうやってまんまと出題者の術中にはまった私は「切ったり」「折ったり」する以外にどのような手の加えかたがあるかを必死に考え続けることになった。つまり最初から正解にたどり着く方向を出題者の罠わなによって消されていたのだ。もちろん、そんな罠にかかるこちらが愚かなのであって、弁解の余地はない。まだ子供だった私はこの問題に徹底的てつていに打ちのめされた。

そうなのだ。⑥問題は、野原に咲いている花ではない。出題者という人間がいて、その人物がこちらの動きを読みながら手がかりと雑音を設定しているのだ。この視点を持たずして問題に対処しようとするのは、槍やり一本で風車に立ち向かった（注8）ドン・キホーテよりも数倍愚かしい。

（富田一彦著『試験勉強という名の知的冒険』より）

（注1）「下り」…東京方面から地方に向かうことを「下り」、逆に地方から東京方面に向かうことを「上り」という。

（注2）「怨嗟」…うらみやなげき。

（注3）「ストイック」…自分に厳しいこと。

（注4）「リソース」…「資産・資源」が本来の意味だが、ここでは、「自分が使える時間やエネルギー」という意味で使っている。

（注5）「閾値」…その値を境にして、動作や意味などが変わる値のこと。

(注6) 「自縛じじょうじばく自縛」：自分が自身の言動にしばられて、自由にふるまえずに苦しむこと。

(注7) 「ミスリード」：誤った解釈かいしやくに導くこと。

(注8) 「ドン・キホーテ」：十七世紀スペインの小説『ドン・キホーテ』の主人公。自分が騎士きしであるという妄想もうそうにとりつかれ、旅先で数々の失敗や騒動そうどうをまき起こす。

問1. ——線部①「問題の難易度に大きく関係しているのは手がかりではなく、雑音のほうなのだ」と言えるのはなぜですか。

その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 解答者によって手がかりのとらえ方がちがうので、問題の難易度は、その手がかりとは関係のない部分をどれだけ分かりにくくするかによって決まってくるから。

イ. 手がかりは問題の中に一つだけしか提示することができないので、問題の難易度は、その手がかりをどれだけ理解しやすいものにするかによって決まってくるから。

ウ. 解答者に簡単に気づかれるような手がかりの提示をするわけにはいかないで、問題の難易度は、その手がかりをどの程度まぎらわしいものにするかによって決まってくるから。

エ. 手がかりそのものは誰だれもが納得なっとくする客観的なものでなければならぬので、問題の難易度は、その手がかりをどの程度気づきにくいものにするかによって決まってくるから。

問2. —線部②「出題者がその問いにどのような使命を<sup>あた</sup>与えるか」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 出題者が、その問題にいくつの手がかりを持たせたいと思っているのか、ということ。
- イ. 出題者が、その問題をどのぐらいの人数の人に取り組んでもらいたいと思っているのか、ということ。
- ウ. 出題者が、その問題の正答率をどの程度にしたいと思っているのか、ということ。
- エ. 出題者が、その問題をどんな人たちに解いてもらいたいと思っているのか、ということ。

問3. —線部③「この問題にはいわゆる『問い』の持つ性質のすべてが実に鮮<sup>あざ</sup>やかに使われている」とありますが、「この問題」において『問い』の持つ性質」はどのように具体的に表れていますか。その説明として適切ではないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 正解を提示された解答者が「くだらない」と怒<sup>おこ</sup>るような問題になっている。
- イ. 一回目の「くだらない」の直前に「内容的には」という語句が付け足されている。
- ウ. 「くだらない」という表現があえてひらがな書きになっている。
- エ. 「くだらない」という手がかりに気づけば、簡単に正解を導き出せるようになっている。



問6. —線部⑤「ここにはつきりと『雑音』がある」とありますが、この「鉛筆の問題」における「雑音」には、どのような効果がありますか。四十字以上五十字以内で具体的に説明しなさい。ただし、句読点などの記号も字数にふくめるものとします。

問7. —線部⑥「問題は、野原に咲さいている花ではない」とありますが、筆者はこのたとえでどのようなことを述べようとしていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 問題というものは、出題者が意図して手がかりを隠かくしているものである、ということ。
- イ. 問題というものは、一見取り組みやすく思えるものほど手がかりが見つけにくいものである、ということ。
- ウ. 問題というものは、解答者の予想どおりに手がかりが隠かくされているものではない、ということ。
- エ. 問題というものは、誰もが手がかりから出題者の意図をくみとれるものではない、ということ。

三 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

小学校六年生の「ぼく」の両親は、「ぼく」が三年生のときに離婚し、「ぼく」は母親と妹の三人で暮らすようになった。二年後、養育費が払えなくなったという連絡をしてきた父親に「ぼく」は怒りを覚える。さらに、妹の「美咲」は、七月の初めに病気で急死してしまった。

十一月の学校の文化祭では、「ジョー先生」という有名なピアニストが指導するバンドのコンサートが開催される。「ぼく」をふくめた多くの生徒がリコーダーなど音楽の授業で使っている楽器を担当するなか、「水谷」はギターを担当していた。今年のバンドの目玉はこの水谷のギターになるはずだったが、コンサートまで二か月足らずという時期に、水谷が自転車事故にまきこまれて右腕を骨折し、ギターを弾けなくなってしまう。「ほかにギターを弾ける子なんていないよね」とジョー先生が教壇で頭をかかえていると、「ぼく」は思わず手をあげてギターの代役に立候補してしまう。

小さなどよめきが起こってから、初めてジョー先生は顔を上げた。

「えっ、外山くん？」

そのころには、すでに後悔していた。

「ちよっと、前に出てきて」

あとさきも考えず手をあげるなんて、信じられない。

どうして？

どうしよう？

足がもつれた。よろけるようにして前へ出てゆくと、みんなの視線はますます強くなって背中にそそがれた。痛いからいだ。

「弾けるんだね？」

ジョー先生の声は低かったが、うむを言わせぬ語調だった。

「はあ」

「習っているの？」

今度は答えなかった。

ただうつむいていると、音楽室の床はキズだらけだ、と気づいた。

「ギターは持ってるんだね？」

ぼくは目をふせたままかぶりをふった。

意外だったのだろう。一瞬、間があった。

「あした、同じ時間にここに来られるかい？」

「はあ」

消え入るような声で答えた。

「ギターを用意しておくから」

もうのがれようがなかった。

ぼくはだまっとうなずいた。

① 母さんかあにはれたらどうしよう？

まず、そう思った。

かくし通せるだろうか？

母さんさえコンサートに来なければ……

母さんは工場とコンビニをかけもちする毎日だ。学校行事にも保護者会にも、顔を出したことはほとんどない。ママ友もないから、うわさからばれることはないだろう。けど、コンサートは仕事が休みの日曜日だ。どうしよう？

その夜はむし暑かった。ガラス戸を開けて横になると、窓の下の夜道に行く足音は昼間よりも高く、耳についた。いつまでも眠れなかった。

ギターなんか弾くどころか、二度とふれるつもりはなかった。父さんからもらったギターは、自分でたたきこわしたのだ。弾く資格だつてあるはずがない。

ギターとギターにまつわる全てが父さんにつながっている。父さんがぼくたちを捨てたのと同じように、ギターをたたきこわしたあの瞬間、しゅんかんぼくも父さんを完全に捨てたのだ。

美咲が死んだことさえ知らせもしなかった。知らせれば、父さんは父親らしく後悔もし、苦しみもしただろう。でも、知らせてなんかやるものか。そうも思った。完全に無視することは存在を否定することだ。② そんな形でせめてもの仕返しをしてやりたかった。

父さんなんかじゃない。

ぼくには父さんなんかいない。

いなくて、いい。

なのにまだギターを弾こうとしている。父さんから習ったギターを……。

むしろ返すことになる。頭も心も混乱し、動揺どうようしていた。母さんにも同じ思いをさせたくなかった。

あとから思い出すと不思議だけど、くよくよ思い悩なやんだそのとき、うまく弾けないかもしれない、という不安はみじんもなかった。かといって、ぼくならうまく弾ける、という自信もなかった。

そう、弾けるとか、弾けないとか、そういうことを考える余裕は全然なかった。だからこそ、どうして手をあげたのか、説明がつかなかった。

寝返りばかり打っているうちに、十一時を過ぎたのだろう。母さんが仕事から帰ってきた。疲れきっているのにちがいない。ドアを閉めてすぐ、たぶんドアにもたれて大きなため息をつくのが聞こえた。

ぼくはとっさに寝たふりを決めこんだ。

母さんはそれからどさつといすにすわりこんだまま、しばらく動かなかった。だいぶたつてから力をふりしぼるよう  
に立ち上がり、トイレを使ってから台所のシンクで手と顔を洗った。冷蔵庫から何か取り出して、ぼそぼそ食べているらしい。お茶くらい入れればいいのに、水道の蛇口からコップに入れた水を飲んだだけだった。

聞き耳を立てているだけで、寝ているぼくを気づかい、何をするにもできるだけ音を立てないよう努めているのがわかった。それがもうくせになつていなのだ、とわかった。

ぼくがしいておいた布団に母さんがぐったりと横になると、ぼくは母さんに背を向けたまま、タオルケットをかんで息を殺していた。

幸い、まもなく小さな寝息がもれた。ようやく身をほぐして、今度はぼくがこっそりトイレに立った。

それから長いこと眠れなかった気がする。

が、ついに眠りこむと、今度は【1】夢を見た。ギターを弾く夢を見た。

父さんがおさえた(注1)コードを、ボロン。

自分もまねして、ボロン。

ドッドーレドシララソソラソ……。

父さんが弾くのをまねて、いつまでも弾いていた気がする。

翌日の放課後、重苦しい気持ちをかかえて音楽室へ向かうと、練習日でもないのにドアの外にはバンドのメンバーが群がっていた。

「外山、だいじょうぶなの？」

井村いむらが開口一番、聞いてきた。

「えっ、ああ」

「信じられないよ。ギター弾けるなんて、ひと言も言わなかったじゃん」

「えっ？ うん……」

みんなに囲まれ、<sup>③</sup>いたたまれない気持ちで立ちつくしていると、ギターケースをさげたジョー先生が小走りにやってきた。

「さ、みんな。どいて、どいて。心配しないでいいから」

先生はぼくを先に音楽室に通すと、みんなをろうかに残したままドアを閉めた。

「あ、そこにすわって」

先生は机に置いたギターケースを開けながら言った。

「きみは六年生にしては大きいから、大人用のギターでもいいと思う。でも、少し小ぶりのを友だちのギタリストが貸してくれた。小柄こがらな人や女性が使うサイズだって」

いつの間にか、まるで時間の流れが変わったみたいだった。ギターを取り出す先生の(注2)一挙手一投足がスローモーションで見えた。中年男性にしては長くてきれいな指の一本一本が、ダンスをするように優雅ゆうがに動く。映画の一場面のように。ピアニストの指だ。

全てが夢のようだった。

いい夢なのか、悪い夢なのか。

ギターが手わたされた瞬間、背すじにぶるつとふるえが走った。時間の流れは瞬時にして現実のものになった。

重はずがないのに、ギターはずしつと重い。楽器の重みだけではない。責任という重圧がのしかかってきた。ぼくは【2】ひざの上にボディをかかえなおし、左手でネックをにぎりしめた。鉛なまりのような足を足台に引き上げた。すると……。

初めてさわるギターだ。会ったこともない人からの借り物だ。

なのに、心より先に、手と体がこのギターを素直すなおに受け入れたのがわかった。なつかしい感触かんじよくだった。久しぶりの、でも、確かによく知っているものだ。

「なんでもいいよ。何か弾いてくれる」

ジョー先生は気楽な調子をよそおってうながした。

すぐには指が動かなかった。

ぼくは目を閉じて、やっとの思いで、ボロン、と弦げんをかき鳴らした。きのう夢の中で弾いたコードのひとつを。

【3】した。美しい和音ひびの響ひびきが、いつまでも空気を伝ってゆく……。

続いて、コードをもうひとつ。

もうひとつ。

それから、ペグ（糸巻き）をギリツと回しては（注3）調弦ちょうげんし、試しにそつとあるメロディーをはじいてみた。

ドッドードレドシラソソラソ……。

音色の美しさが楽器の良さを語っている。プロが貸してくれたものだ。水谷のギターよりさらに高価なものにちがいない。

（A）気をもんで目の前に立ったままだった先生が、（B）そのときになって初めてななめ前のいすに腰こしをおろした。

「なんの曲？」

父さんが作った曲だ。たぶん……。

ぼくは答えずに、もう一曲のワンフレーズを弾いた。

レレシソレー……。

弾き終わったら、頭の中で自分自身の小さな声がゴーサインを出すのがわかった。

よし、行け！

ぼくはひと呼吸おいてから、ゆっくりと『愛のロマンス』を弾きだした。

水谷がくり返し弾いたソロだ。頭にこびりついているメロディーだ。

初めて弾くのだから、もちろんうまくはない。それでも、事の成り行きに耳をそばだてていたらどうかの仲間たちから、どよめきが起こるのがわかった。

しばらくして、頭の中のメロディーがとだえたところで、ぼくは手を止めた。

顔を上げると、(C) 先生は穴のあくほどぼくを見つめていた。

「譜面ふめんはいらないんだね？」

とっさに答えられなかった。

「あ、いえ、はい」

(D) 先生は無言で頭をふっている。

きつと気に入らなかつたんだな、と思った。

④ 水谷くんが弾いた通りに弾いたね。聞いて覚えた通りに。ちがうかい？」

それじゃ、いけなかつたのだろうか？

ぼくが答えるより早く、先生は「はっ！」と、短く笑ってから、両ひざをポンとたたいた。

「絶対音感かもしれない」

えっ？

その言葉を聞いたことはある。音楽に関する特別な能力か何かだ。そんなの、ぼくに関係あるはずがない。「この音、音名で答えられるかい？」

オンメイ？

先生は立って行って、ピアノの鍵盤けんばんを一回だけ軽くたたいた。

「ソ、つてことですか？」

「そうだよ。じゃあ、これは？」

ぼくはだまりこんだ。

「ギターなら弾ける？」

「はい」

先生は一音ずつ何度かくり返して弾き、そのたびにぼくはギターで同じ音を鳴らした。

「うん、ソのフラット」

「ラのシャープ。⑤ギフトギフトだなあ」

「えっ？」

「神さまからの贈り物おくだよ」

「そんな……。だって、水谷くんが弾くの何十回も、何百回も聞いたからです」

『愛のロマンス』を弾けたとしても、それしか理由は思いつかない。

「水谷くんも、とてもうまい。練習すれば（注4）オリジナルの『愛のロマンス』くらいじゆうぶん弾ける。でも、これは小学生の合奏曲だからね。ソロパート以外は、オリジナルよりも簡単に編曲したんだ。きみはその通りに弾いた。譜面も見ずに。」

「一か所だけ音はずしたね」

先生はさも面白そうに笑った。

「水谷くんがいつも、同じようにはずした箇所だ。」

水谷くんの代わり、やってくれるね？」

ぼくはしばらく床を見つめていた。それから、しぶしぶ無言でうなずいた。

(今井恭子著『ギフト、ぼくの場合』より)

(注1) 「コード」…和音。

(注2) 「一挙手一投足」…一つ一つの動作・ふるまい。

(注3) 「調弦」…ギターの弦の音程を調整すること。

(注4) 「オリジナル」…原曲。

問1. —線部①「母さんにはれたらどうしよう？」と「ぼく」が思ったのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 「ぼく」が再びギターを弾きはじめることによって、母さんが父さんのことを思い出し、心を乱してしまうのではと心配したから。

イ. 父さんからギターを習っていたころの楽しかった生活と現在の苦しい生活とを母さんが比べ、落ち込んでしまうと思ったから。

ウ. ギターには二度と触れないと宣言していたにもかかわらず、「ぼく」がまたギターを弾きだしたら、母さんに嘘つきだと思われそうだから。

エ. 「ぼく」がコンサートでギターを弾くことを母さんが知ったら、新しいギターを買ったり仕事を休んだり、経済的な負担をかけることになるから。

問2. 本文中の空らん【1】〜【3】に当てはまる語句として適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用してはいけません。

- ア. えんえんと    イ. ぞくつと    ウ. こわごわと    エ. さめざめと    オ. さらりと

問3. —線部②「そんな形でせめてもの仕返しをしてやりたかった」とありますが、「ぼく」は何のために「仕返し」をしたのですか。その説明として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 父さんに妹が死んだことを知らせないようにするため。  
イ. 父さんの心の中からぼくたち家族の存在を消し去るため。  
ウ. 父さんを完全に無視してその存在を否定するため。  
エ. 父さんに後悔や苦しみこうかいを与えるため。  
オ. 父さんに父親らしいふるまいをさせないため。

問4. —線部③「いたたまれない」の語句の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 緊張きんちやうして身動きがとれない  
イ. うしろめたくて周囲の人に申し訳ない  
ウ. 居心地が悪くてその場にいるのがつらい  
エ. 自信が持てずに落ち着かない

問5. —線部(A) (D)の行動から読み取れる「ジョー先生」の気持ちとして適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用してはいけません。

ア. 「ぼく」がそれなりにギターを弾けそうなので、少し安心している。

イ. 「ぼく」が絶対音感の持ち主かもしれないという思いが確信にかわりつつある。

ウ. 「ぼく」のギターの腕前には感心するものの、「水谷」が弾いたとおりにしか弾けないことにやや不満をいदैいてる。

エ. 「ぼく」が「水谷」の代役を務められるほどギターをうまく弾けるのか、半信半疑でいる。

オ. 「ぼく」にこれほどまで音楽のセンスがあるとは、と驚いてる。

問6. —線部④「水谷くんが弾いた通りに弾いたね。聞いて覚えた通りに」とありますが、ジョー先生はなぜこのように考えたのですか。その理由を二つ、本文にそくしてそれぞれ二十字以上三十字以内で説明しなさい。ただし、句読点などの記号も字数にふくめるものとします。

問7. —線部⑤「ギフトだなあ」とありますが、ここでの「ジョー先生」の気持ちとして最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. しばらくギターに触れていないのにうまく弾けるとは、きっと神さまから使命を与えられている子なのだなあ。
- イ. 耳で聞いた曲をそのまま弾けてしまうなんて、きっと地道に努力を重ねてきたのだろうなあ。
- ウ. 聞いた音をまちがいに聞き分けられるとは、生まれながらにして特別な才能を持っているのだなあ。
- エ. ピアノで出した音をまちがえずにギターで返してくるなんて、非凡ひぼんな能力を持つ者でしょうししか味わえない感覚だなあ。

( お わ り )

第2回

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

一

⑨	⑤	①
て		
⑩	⑥	②
ける		
	⑦	③
	える	
	⑧	④

二

問 1
問 2
問 3
問 4
(1)
問 5
(2)

三

問 7
問 6
問 5
問 4
問 3
問 2
問 1
問 7
問 6
問 5
問 4
問 3
問 2
問 1

問 5
(A)
(B)
(C)
(D)

問 7	
問 6	
20	20
30	30

